■ 書　評 ■

《神経心理学コレクション》
ジャクソンの神経心理学



山鳥　重●著
山鳥　重，河村　満，池田　学●シリーズ編集

愛知医科大学教授・精神科　兼本浩祐

私が山鳥重先生のお話を直接聞かせていただいた機会は，非常に近い興味・関心を継続して持ってきたこと，神経心理学の層的理解を信奉してきたことを考えれば驚くほど少なく，わずかに2回ばかりである。いずれも今から20年以上も前のことで，私は研修医かレジデントの時で先生が私の発表にコメントしてくださった時のことだったと思う。

最初は保続の発表に関してであったが，2回目は側頭葉てんかんの言語自動症のことについてであった。山鳥先生はその時に，「主体意識から客体意識へとまさに言葉が音を持った言葉として生まれ落ちようとしている瞬間に宙吊りになって固定された状態が再帰性発話だとジャクソンが書いており，実際にそういう実例はてんかん臨床であるのかどうか」といった質問をされた。その時私は質問の背景や意味を良く理解できず，単純に「ないです」と答え，会話はそこで終わりになってしまった。しかし先生のその質問はその後，ずっと私の中に残っていて，自分でジャクソンを読むようになって先生の質問の奥深さを知ることになり，さらにその後の臨床経験の中で，まさにジャクソンの言うような，最初の発作体験の時に言わんとしていたことをその後発作が起こるたびに何十年も繰り返して発語し続ける症例が存在することを何度か確認することになった。

ジャクソンの思想は，てんかんの世界においてはいまだに深く浸透し，引用されることも多いが，脳科学あるいは神経心理学の分野では常にマイノリティの側にあったといってもよいだろうと思う。その理由の1つは，脳を表象の図書館のように考えるマイネルトを始祖とし，ウェルニッケ，リープマン，ゲシュヴィントに至る20世紀の脳科学の思考の流れと，根本的に異なる思考の流れをジャクソンが体現していたことにある。ジャクソンにとっての表象は，エーデルマンのいう「思い起こされた現在（“remembered present”）」に近い。多数の感覚運動経路が，内的あるいは外的刺激に触発されて，適者生存競争を始め，その勝利者が「今，ここで」の実現された表象となって出現するというジャクソンの考えは，例えばレンガを見たら脳の中のレンガ表象が賦活され，その結果レンガがレンガだと認識されるというマイネルトが集大成した考えとは大きく異なるものであった。

2つ目の理由は用語に対するジャクソンの哲学者のような厳密さにある。しばしば医学者は言葉の区別に鈍感で，そうした区別を強いられることを嫌がる傾向にある。例えばジャクソンが区別に腐心した，心理的プロセスとしての“感覚”と，物理的脳的プロセスとしての“印象”。山鳥先生も訳出に苦労されているように，そもそも私たちに純粋な知覚はなく，ベルグソンの言葉を借りれば，通常私達が五感を通して受け取っているのは「記憶の刻印を否応なく帯びた知覚」であって，ベルグソンは議論を進めるためにイマージュという仮の用語を致し方なく造語しこれに当てている。実はジャクソンが厳格に線引きをしたこの印象と感覚の関係をどのように考えるかは，今脳科学を考える上でのホット

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2015

2026/11/11 09:03:36

な急所の1つになっている。

陰性症状と陽性症状は，現在，精神科医であれば知らない者がいないコンセプトであるが，ジャクソンが例えばデジャ・ビュのような複雑な体験は解放現象としての陽性症状であり，臭いのような原始的な感覚とは機序が違うと考えていたことを本書を通して山鳥先生に教えていただき，陽性症状についてのジャクソンの徹底した姿勢をあらためて再認する機会となった。ジャクソンにとっては陽性症状とはあくまでもより高次の機能系が障害された結果，より組織されより障害への抵抗力の強い機能系の脱抑制であって，例外的にではあっても人というソフトの新たな可能性を開示するものなどではあり得ない。ジャクソンを徹底して信奉しているてんかん学者達がこのあたりについてとても厳格な姿勢を示す理由が本書を読みながら初めて私には納得できた。

階層（レイヤー）という考えは20世紀の脳科学から21世紀の脳科学を隔てる1つの鍵概念ではないかとも思う。全体は部分の総和ではなく，それまでにはなかった新たな質がそこに生ずる，つまりは層と層の間に不連続な断裂が生じ，それが結局は「私」や「意識」を，“体を操る小人”とか“魂”のような表現を導入せずに説明するための手立てになるからである。そして，本書で山鳥先生が強調されているように，記憶・感情・判断といった組織化の緩い機能は，より局在化される組織化の度合いの強い機能群とは別の階層を形作っているというジャクソンの考えは20世紀の脳科学よりも21世紀の脳科学にはるかに親和性がある。

私はジャクソンの伝記について誤解していたところがあり，山鳥先生に自著の編集担当者を通して間接的にそれを指摘していただいたことがあるが，控え目，温厚，公平，しかし学問には厳密で常に原理へと遡ろうとする一貫した姿勢を保ち続けたジャクソンは，山鳥先生ご自身と重なるところがある。冒頭の学会での山鳥先生のご質問は，何十年も私の中に余韻を残すような含蓄があったが，あの時その質問の射程を理解できなかった私を詰るでもなく，温かい質問で，しかも当時，大きなキャリアの差があったにもかかわらず，対等な同僚として質問していただいたように記憶している。本書を読みながらずっとそのことが脳裏から離れなかった。

A5・頁224　2014年
定価：本体3,400円＋税
[ISBN978-4-260-01977-4]
医学書院刊

2026/11/11 09:03:36